ミューズ　No. 46

平和のための博物館・市民ネットワーク通信

発行：2021 年12 月

編集：安斎育郎、山根和代
musejapankyoto@gmail.com
イラスト：戸崎恵理子＆ Pegge Patten

2021 年度「平和のための博物館市民ネットワーク」全国交流会と総会の報告

2021 年 11 月 20 日、「平和のための博物館市民ネットワーク」の全国交流会がオンラインで開催され、ひめゆり平和祈念資料館の古賀徳子氏による特別報告をはじめ、以下の 10 件の報告を受け、意見交換を行いました。

① 山根和代（国際平和ミュージアム専門委員）
② 安斎育郎（ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館）
③ 出原恵三（平和資料館・草の家）
④ 福島在行（平和博物館研究会）
⑤ 浅川　保　（山梨平和ミュージアム）
⑥ 寺沢秀文（満蒙開拓平和記念館）
⑦ 蓮沼佑助・安田和也（第五福竜丸展示館）
⑧ 山下芙美子（wam）
⑨ 石岡史子（NPO 法人ホロコースト教育資料センター(Kokoro)）
⑩ 石橋星志（すみだ郷土文化資料館／東京大空襲・戦災資料センター）

交流会に続いて総会が開かれ、安斎育郎議長の下で、①規約案、②2022 年度全国交流会の担当館、③2022 年度運営委員の選出、④助言者制度の創設、⑤会計についての中間報告、について審議が行われ、運営委員会の提案通り承認されました。

Erico

福島の山寺に開いた平和博物館「伝言館」

安斎育郎（伝言館副館長）

東北地方太平洋沖地震とそれに伴う東京電力福島第１原発事故から１０年目に当たる 2021 年３月１１日、福島県双葉郡楢葉町の浄土宗の古刹・宝鏡寺（１３９５年創建）の境内に、上野の東照宮で３０年間灯され続けてきた「非核の火」が移設され、「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ非核の灯」として生まれ変わった。「非核の灯」に隣接して、第３０世住職・早川篤雄氏と安斎育郎の連名による「原発悔恨・伝言の碑」が建立され、そ

の隣に木造２階建ての平和博物館「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」が開設された。伝言館には、地階に日本被団協および第五福竜丸展示館の協力による広島・長崎・ビキニの核被害に関する展示が、また１階には福島第１原発事故に関する独自展示が展開されている。館長は早川篤雄住職、副館長は安斎育郎（立命館大学名誉教授）および桂川秀嗣（東邦大学名誉教授）である。伝言館は折に触れて「基地問題と沖縄」や「核兵器禁止条約」に関する特別展示を行なう準備を進めており、原発に関する展示では、事故の原因や影響に関する展示だけでなく、住民運動の歴史的資料なども展示している。

また、伝言館は折に触れて「伝言館声明」を発しており、すでに、❶福島原発事故の汚染水海洋放出について ―「科学性と経済性の土俵」に乗せられる（2021 年 4 月 25 日）、❷高齢原発の再稼働の動きへの重大な懸念についての声明（2021 年 5 月 2 日）、❸日本原電の敦賀原発調査資料の書き換えについて―原子力規制行政の根底を破壊する犯罪行為（2021 年 8 月 31 日）、❹佐賀県唐津市の原発関連資料の不見識について（２０２１年９月５日）、❺非核・脱原発の未来を選び取ろう―国政選挙を前に（2021 年 9 月 12 日）、❻原発題材の演劇を放送から排除した福井ケーブルテレビについて（２０２１年 11 月 30 日）、などを発出した。さらに、伝言館には「伝言館が提唱するもう一つの安全保障政策」も展示されており、伝言館の考え方を積極的に打ち出す考え方をとっている。

現在、隣接して多目的施設を建設中で、ツアー来館者などが学習や打ち合わせや休憩に利用できるよう、来春には完成の運びである

伝言館は福島県の山寺の博物館だが、扱っている「非核の世界」を希求するテーマは世界大の普遍性を持っており、内外の平和博物館とも協力して、今後とも積極的に発信していく予定である。

木造2階建て

企画展「満州事変 90 年を考える」

浅川　保　（山梨平和ミュージアム）

今年９月から開催中（～来年２月末まで）の企画展の紹介をしたいと思います。今年は、満州事変勃発から 90 年の節目の年です。日清・日露戦争以来の日本の大陸進出政策（大日本主義）を引き継ぎ、15 年戦争の出発点となった満州事変とは何だったのか。その歴史的・国際的位置はどうだったのか…。

また、満州事変後の世論形成、国民の戦争動員に果たしたマスメディア、特に新聞の役割は決定的でした。新聞は満州事変をどう報じたか。事変前には立憲主義の確立、軍縮の実現などどちらかというと自由主義的だった朝日新聞を例に、社論転換の背後に何があったか、それ以外の別の道はなかったのか等を検討してみたいと思います。

また、山梨と満蒙開拓、満州からの引き揚げ体験などを通して、満州と山梨の関わりも考えたいと思います。さらに、2015 年に安倍政権が強行成立させた安保法制は、現代の満州事変にあたるのではという指摘もありますがどうでしょうか。

＜展示内容＞

(1)満州事変とは、その歴史的・国際的位置、(2)満州事変とマスメディアの転換―朝日新聞を中心に、(3)満州と山梨、(4)安保法制の強行と満州事変

「中帰連平和記念館」近況

事務局長：芹沢昇雄

記念館は地元川越の「ウェスタ川越」で 11 月 21 日（日)、「15 周年集会」を開催しました。130 名余りが参加し遠くは倉敷や長野の会員も駆けつけてくれました。

松村理事長の主催者挨拶の後、芹沢事務局からこの 15 年間の経過報告があり、その後に細川理事から「国際平和博物館会議」など海外との交流報告もありました。

続いて、記念講演として笠原十九司さん（都留文科大学名誉教授）から、1 時間余りの『現在の中国とわれわれの運動の課題』と題した講演をお願いしました。

その後、休憩に入り会場に展示した、中帰連会員が自らの戦争体験を描いた油絵や、中帰連関連の新聞記事などを見て戴きました。

休憩後は星野理事(Mr. Hoshino)の司会で笠原さんも入り、学者、会員、中帰連ご遺族、若い研究者の 5 人のパネラーでパネルデスカッションが開かれ、会場との活発な質疑応答もありました。

「参加者カード」から非会員が会員の 2 倍の参加があり、アンケートで「友達から聞いて」との回答もあり、来館者や中帰連・記念館を知っている方から、広がっている感じがしています。「20 周年集会」に向け頑張ります！

【NPO 中帰連平和記念館】)
TEL&FAX：049-236-4711（水・土・日）
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com
ＨＰ：http://npo-chuukiren.jimdo.com/
（臨時休館あり「事前連絡」お願いします）

原爆の図丸木美術館

岡村幸宣（ゆきのり）

7 月 17 日から 9 月 5 日まで、白川昌生個展「ここが地獄か、極楽か」を開催しました。白川は、2015 年に群馬県の朝鮮人強制連行追悼碑の撤去問題を取り上げた彫刻を制作し、「あいちトリエンナーレ」の「表現の不自由」展にも出品しています。今夏の企画では、歴史修正主義を真正面から批判する新作絵画を発表し、「生き恥さらすな　玉砕覚悟」「逃げるな非国民」などの戦時の日常の空気感を支えた戦意発揚スローガンを天井から吊りました。同じ空間には、現在も続く記憶の改ざんと抑圧に抗う意志を示すように、「わたしは　わすれない」と記された幟旗も掲げられました。同時期には、東京の被爆樹木を取材した菊田真奈の写真展「手についた焦げ跡にふうっと息を吹いて飛ばす」も開催しました。

それらの企画に先立つ 5 月 1 日から 6 月 13 日までは、特別企画として藤井光展「爆撃の記録」を開催。東京大空襲と戦争記録の継承のために計画された東京都平和祈念館が、歴史認識をめぐる意見の相違から現在も設立に至っていない問題に焦点を当てた展示で、いずれも現代美術の手法から 76 年前の戦争の記憶にアプローチする取り組みが注目を集めました。現在は、丸木位里、丸木俊が晩年に手がけた共同制作《大逆事件》の特別展示も行っています（1 月 30 日まで)。

満蒙開拓平和記念館

寺沢秀文

当館もコロナ禍の影響を大きく受け、昨年春には２ヶ月間の臨時休館、現在も来館者数はコロナ禍前のほぼ半減の年間１万人程度で推移しています。ただ、県外に行けなくなった県内の学校の修学旅行等が来館してくれています。コロナ対策としてリモート講話の配信等にも取り組んでいますが課題山積です。コロナ禍のために館内ボランティアグループ「ピースＬａｂｏ」の活動も制約、リモート活用等と共に館内ガイド等も部分的に再開、またビデオ収録した語り部の証言ビデオの文字起こし等にも取り組んでもらってもいます。これには地元の高校生たちなどもボランティア参加。当館の大切な活動の一つ「語り部」の定期講演も昨年はほぼ全面休止しましたが、今春から再開。先頃には長野県との共催事業として、「語り部」のお話をリモート配信する等の取り組みも行われました。引き続き厳しい環境下にはありますが、来年で開館１０周年を迎える当館、満蒙開拓の史実を伝える全国唯一の民間施設としてこれからも頑張っていきたいものと思っています。

連絡先：info@manmoukinenkan.com

アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」（wam）

山下芙美子

1991 年 8 月 14 日は金学順さんが名乗り出た日です。2012 年 12 月のアジア連帯会議でこの日が日本軍「慰安婦」メモリアル・デーと決定して以来、日本軍「慰安婦」として被害を受けた女性たちを記憶する様々なイベントが各地で催されています。wam では 2017 年から、亡くなられた女性たちの名前を読み上げて記憶し、白い花をささげる「追悼のつどい」を行っています。新型コロナの感染拡大に伴い、オンラインでの開催となった今年は、6 ヵ国から 16 人の女性たちの訃報が届きました。午後にはトーク・イベントを開催、植民地歴史博物館（ソウル）の協力を得て、オンラインで韓国とつなぎ、金学順さんを近くで支えてこられた李熙子さん（太平洋戦争被害者補償推進協議会代表）からお話を伺いました。

また、「wam セミナー 天皇制を考える」の第 5 回

は表象文化論、美術史、ジェンダー論が専門の北原恵さんをゲストにお迎えして「近代天皇と家族の表象」と題して 11 月 3 日に開催しました。
次回特別展は「中学生のための『慰安婦』展＋教科書」(仮題)。ミュージアムにとって他人事ではない「政府による歴史的事実の記述への介入」の問題に真正面から取り組みます。2022 年 1 月 15 日からの開催に向けて鋭意準備中です。

核被害×気候変動
第五福竜丸展示館

蓮沼佑助

第五福竜丸展示館では、2021 年 10 月から 22 年 3 月まで、企画展「被ばくの島マーシャルのサンゴと人と海と」を開催中です。米国による 67 回の核実験の爪跡が色濃く残るマーシャル諸島は、今日気候変動による海面上昇で水没の危機にある国の一つです。プロダイバー・環境活動家の武本匡弘さん、フォト・ジャーナリストの島田興生さんのお二人をナビゲーターに、核実験被害と気候変動という二つの大きな問題を、マーシャル諸島を中心に繋げます。
温暖化による気温や海水温の上昇により、マーシャル諸島では重要な食糧であるヤシの木が枯れ、サンゴ礁が白化し魚が海からいなくなるなど、住民の生活にとって重大な問題となる事態が起きています。海面上昇で土地が削られ、ハワイや米国への移住を求める声も起こるなど、気候変動はマーシャル諸島にとってまさに目前に迫る危機となっています。
かつてビキニやロンゲラップの人びとは、核実験により故郷の島を追われました。核実験で出来たクレーターに汚染された土砂などを詰めた核廃棄物処理施設“ルニットドーム”は上昇する海に浸食され、サイクロンにより崩壊する危機にさらされています。大国から押し付けられた核の遺物と、同様に先進諸国により引き起こされる気候変動の脅威が、マーシャル諸島で今、交差しているのです。
本企画展では、マーシャル諸島の若者が描いた核被害や気候変動に関する絵画作品も展示しています。現地に暮らす若者がこれらの問題をどうとらえているのかを伝える作品群です。展示館 YouTube チャンネルではナビゲーターのお二人によるギャラリートークも配信します。

経年劣化でひび割れが進む”ルニットドーム”
(島田興生)

すみだ郷土文化資料館／
東京大空襲･戦災資料センター

石橋星志

コロナ禍で交流会がなかった期間の、東京空襲関係の展示について紹介した。筆者の関係する、すみだ郷土文化資料館と東京大空襲・戦災資料センターの取り組みを取り上げた。

すみだ郷土文化資料館では、4 年前に空襲の担当を引き継いで以降、毎年空襲体験画の展示も行っている。また、2 年前と今年春の 2 度企画展を実施した。

空襲研究には未解明の問題が多くあり、思われているより、実態が分かっていないということを思い至った。報道は毎年なされるが、こうした問題の解明までには至らない。未解明の課題としては、以前から取り組んでいた、犠牲者の遺体処理の実態解明や、現段階で分かっている犠牲者名や亡くなった場所等の情報の展示などがある。

今年春の展示では、『東京大空襲・戦災誌』に掲載されている公式の被害記録の原資料確認を企図したが、上手くいかず、被災地図の比較検討と、被災実態の地図化などを行った。

一方、東京大空襲・戦災資料センターでは、常設展示をリニューアルし、昨年 6 月から公開している。展示制作は、筆者も含む若手研究者グループで原案をまとめた。その後、体験者をはじめ、教育関係者や第一線の研究者の声も入れて検討を重ねた。さらに、受け手となる今後の世代も想定した。現在まで学校見学の来館者数が戻っていないので、評価については今後の課題である。

交流会では特に力を入れた、東京区部の被災地図、集束焼夷弾模型、3 月 10 日の夜の展示など、中心となる展示を写真で紹介した。今後、多くの方に見ていただき、感想を頂きたいと思っている。

NPO 法人ホロコースト教育資料センター

石岡史子

NPO 法人ホロコースト教育資料センター(愛称 Kokoro)は、ホロコーストの歴史と記憶を教材にした人権・平和教育に取り組んでいます。コロナ禍で生まれた学生による取り組みをご報告します。歴史と出会い、誰かと共有したいと考えた有志の大学生たち 9 名が集まり、8 月に『「わたし」と「れきし」展～ホロコーストの記憶と今を生きる私たち～』を開催しました。それまで画面越しに言葉を交わしただけで、学年も専攻も様々な若者たちでしたが、8 ヶ月間、毎週ミーティングを重ねて、展示を制作しました。その内容は、史実を伝えるというよりも、自分たちの中に生まれた「もやもや」や葛藤や問いを来場者に投げかけるものでした。それに応える形で、展示を見た来場者の皆さんも言葉を書き残し、一つの空間の中で展示を介したコミュニケーションが生まれていて興味深い試みでした。次世代による歴史/記憶の継承の一つの形とも言えるのではないかと思いました。これらの学生たちと 10 月にはドイツ連邦政治教育センター企画の国際歴史フェスティバルに参加しました。来年はベルリンに世界の若者たちを集めたいという企画があり、学生たちの輪を広げていきたいと考えています。

平和博物館の役割はどこまで ―ガイドとしての悩み

丸山　豊（ピースあいち）

近年ピースあいちに来館する団体も多様化し、「近現代史の学びの場」としての役割も期待されるようになってきました。そのためガイドにも単なる展示説明だけでなく、近現代史全体像の深い歴史認識が求められます。

11 月に入りある大学の国際法の先生からゼミ学生１６名に「東京裁判（極東国際軍事裁判）と関連付けてガイドをして欲しい」と依頼があり、正直あわてました。中高の歴史教師であった私も「東京裁判」を教壇で正面から取り上げたことはなかっただけに、不安でした。今の日本は「東京裁判克服論、否定論」が「大東亜戦争」「戦後レジーム」「政権による教科書介入」「憲法」「基地問題」と結びつき、若者はこうした「歴史修正主義」をＳＮＳでそのまま受け入れている現実があります。言い換えれば「東京裁判否定＝大東亜戦争美化」の助長にもなりかねません。

そこで、大学と相談し、館内で２０分間「東京裁判をなぜ今取り上げるのか」と題し、**東京裁判の**

「**問題点**（戦勝国の国際法に基づかない裁判だった）、**課題**（天皇制を残し、アメリカ主導による占領に有利な冷戦裁判）、**意義**（日本の侵略行為、残虐行為を国民がはじめて知り得た。平和、人権などの国際法の成立、国際司法裁判所の設置が進んだ。）」を中心に展開しました。時間が足りない中、侵略戦争と認めない中学自由社の教科書に関心を示すなど、学生の問題意識の高まりも感じました。

レクチャー後は二千万人以上を殺害した日本の加害とは何かを中心にガイドしました。東京裁判では『何が裁かれ、何を取引し、誰を免罪したか』。具体的には南京事件、重慶爆撃、日本軍「慰安婦」、徴用連行、強制労働、７３１部隊の展示だけでいいのか。ガイドをしながらピースあいち展示の限界（日本の捕虜虐待、一般市民の殺害、毒ガス等の展示もないうえ、米国の原爆投下責任、ソ連によるシベリア抑留も掘り下げていない）を感じたことも事実です。この後、学生は大学のゼミで「東京裁判の模擬裁判」を行うそうです。これを機に東京裁判の新たな学びにつながることを願い、ガイドを終えました。

多くの平和博物館は特化された展示が中心であり、戦争の全体像と現代世界までの展示を求めるべきかは大きな課題です。一方デジタル化は、表現の自由に介入するリスクが伴います。データの国家（行政）管理、負の歴史を排除したＶＲ・ゴーグルが主役となり「あらゆる要望に応え、どこからいつでも入室できる仮想空間博物館」となる日も近いでしょう。その時、館のオリジナル性も同時に失われることになります。

コロナ禍の今回のガイドは「平和博物館の役割はどこまで」を悩みつつ考えさせてくれた体験となりました。

立命館大学国際平和ミュージアム

清水郁子（課長）

当館は 2021 年 4 月から 2023 年 9 月のリニューアルオープンまで、長期の全館休館を行っています。リニューアル準備ではほぼ、新しい展示の設計を終え、これから 1 年半をかけて展示資料を整えていく予定です。建物も大規模改築を行いますので、2023 年秋にはぜひ新しくなった当館にお越しください。

2021 年 12 月以降は資料の寄贈受入や閲覧・貸出も中止となりました。

そのような中でもホームページや様々な発行物を通して可能な限り館としての取組の発信に努めています。今年の主な取り組みとしては、オンライン講演会の開催、貸出用教材・パネルの運用を引き続き行うとともに、新たに「デジタル平和講義・講話」を作成し DVD での貸し出しを始めました。（デジタル平和講義は館長、名誉館長による 30 分程度のデジタル教材で、6 本作成しました。デジタル平和講話は当館「平和友の会」のみなさんによる戦争体験や平和学習に役立つ 30 分程度の講話で、現在 11 本が完成しており、今後も充実を目指しています。）また、グループで楽しく平和について学べる「すごろく」を開発し、ホームページで公開を始めました。

平和教育研究センターでは、オンライン中心の公開研究会の開催や紀要や資料研究報告書の発行も行っています。

立命館大学
国際平和ミュージアムだより
KYOTO MUSEUM FOR WORLD PEACE, RITSUMEIKAN UNIVERSITY
Vol.29-2（通巻85号） 2021.10.30発行
すごろくゲーム「平和Lab.～平和研究室へようこそ～」

国際平和ミュージアムだより

オンライン講演会の様子

第 43 回戦争と平和を考える資料展
平和資料館･草の家

出原恵三（副館長）

高知空襲を記憶するために始まった資料展も 43 回目を迎えました。今年は「『満州事変』９０年・侵略戦争を考える－核兵器禁止条約発効の年に–」を主題に 7 月 2 日から 11 日まで高知市立自由民権記念館で開催しました。満州事変、平頂山事件、満蒙開拓団、核兵器禁止条約、高知空襲・・・などのテーマを設け、戦争の加害・被害の視点から展示を行いました。

平頂山事件については、中国の撫順平頂山惨案記念館の詳細な調査・研究を下に作られたパネルを展示しました。日本軍が 3000 名近い無辜の村民を虐殺した事実を初めて知ったという方も多く、日本の加害についてもっと向き合わなければならないという感想が寄せられています。

満蒙開拓団については、高知県十和村の万山開拓団の凄惨な逃避行を描いたイラスト集「戦争が生んだ狂気」27 枚を展示しました。同開拓団は 1943 年 547 人が入植し逃避行で 361 人が亡くなっています。元開拓団員によって描かれたもので、自殺用の青酸カリを渡された人、列車から投げ捨てられる遺体、道端に落ちた人の足や腕を食らう野犬、ソ連兵に裸にされた女性などこの世の出来事とは思えない 76 年前の現実を前に多くの方が凝視していました。誤った国策がどれほどの犠牲を強いるのか告発しています。この他、戦時下「巨大監獄」と化していた朝鮮半島の状況もソウルの植民地歴史博物館から借りたパネルで紹介しました。今回は右翼の妨害もなく無事に終えることができました。コロナ禍での開催でしたが 520 人の来場者がありました。

岡まさはる記念長崎平和資料館

理事長　崎山昇

昨年当資料館を訪れた若い人たちから協力したいとの申し出があり、若い人たちの「ＺＯＯＭミーティング」を今年１月からスタートし、月に１回開催しています。７月１７日に「第６回岡正治さんを語る会」を開催しましたが、ＺＯＯＭミーティングメンバー、福岡の芸術家お二人に、「福岡の若い芸術家から見た岡正治さん」と題してお話をしていただきました。彼らは、３月、６月と２回にわたって１週間程度、長崎に滞在して資料館を

訪れ、「岡まさはる蔵書」の閲覧調査を行い、アーカイブ化を進めています。今後も閲覧調査は続きます。また、ＺＯＯＭミーティングメンバー、国際基督教大学の学生お二人のご協力で英語キャップションの欠落部分の表示を８月に終えることができました。その後、１０月１６日に「もう一度学ぼう！日本の現代史講座第２期」を開講し、第１回は「１９４９年５月－長崎の＜戦後＞の形成」というテーマで開催しました。第２期はオンライン参加も可能にしましたが（第２回、第６回を除く）、これもＺＯＯＭミーティングメンバー、福岡の会員の技術的サポートによるものです。そして、１１月１３日には第２回を「冷戦下の世界－第二次世界大戦直後のヨーロッパを中心に－」というテーマで開催しました。

ひめゆり平和祈念資料館

古賀徳子（学芸員）

2021 年 4 月、ひめゆり平和祈念 資料館は「戦争からさらに遠くなった世代へ」をテーマに 17 年ぶり に展示リニューアルを実施した。リニューアル後に寄せられた「 明るく なった」「わかりやすくなっ た」「よかった」などの感想をもとに、新しい展示の特徴と、入 館者の反応を紹介する。

また、コロナ禍での館への支援の広がりについても報告したい。今年 6 月の SNS での発信が 反響を呼び、「大事な施設だから残しい」 「いつか行きたいので支援します」などのメッセージとともに、半年で約 7400 万円の寄付が寄せられた。

さらに、自治体による親子チケット購入などの支援、沖縄出身のアーティストによる支援ライブが行われた。いずれも、この機会に資料館に足を運んでほしいという支援者側の願いがこめられていた。

私たち職員は、こうした経験を通じて多くの方と出会い、つながりを深めつつある。支援の呼びかけを、財政的な困難を乗り切るための一時的な活動ではなく、館の活動とその意義を広く伝える機会としてとらえなおし、継続していきたいと考えている。

戦争遺跡を「平和の砦」に

出原恵三（平和資料館・草の家）

去る 10 月 2 ・3 日に第 24 回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京東大和大会が開催（オンライン）され基調報告をしました。戦争が終わって 76 年が経過し戦争の記憶はいよいよ戦争体験の無い戦後世代が継承していかなければならない時代を迎えました。戦争の「生き証人」である戦争遺跡の果たす役割は益々大きくなってきました。

戦争遺跡の保存は 1970 年代に入って返還後間もない沖縄で始まり、やがて全国的に平和を願う市民運動として広がって行きました。戦争遺跡は近代史研究の資料、歴史学習や平和教育の生きた教材として広く定着し、今年 10 月現在で史跡など文化財に指定された戦争遺跡は 319 件を数えるに至りました。

しかしながら戦争遺跡への関心の高まりや広がりは、必ずしも戦争遺跡を「平和の砦」しいたいと願う私たちの方向性とは一致していません。あるいは相反するような側面も見られるようになりました。戦争のどんな記憶を、戦争遺跡の何を次世代に継承するのか、など新たな課題も出てきています。

周知のように、近代日本は富国強兵を国是として

日清戦争を皮切りに以後 50 年近く戦争を繰り返してきました。国土が戦場になったのは最後の 1 年足らず、それ以前の戦場は全て朝鮮半島や中国など東アジア地域でした。無数の戦争遺跡をこれらの地域に作ってきました。日本国内には約五万件の戦争遺跡があると言われていますが、その大半はアジア・太平洋戦争期のものです。分けても本土が戦場となった敗戦間際の 1 年間に集中しています。国内に残された戦争遺跡の変遷と分布は、一連の戦争が侵略戦争であったことを端的に示しています。しかしこの最後の 1 年に作られた戦争遺跡に被害の側面を重ね強調し、それ以前の半世紀に及ぶ加害の事実からは目を逸らし、向き合おうとしない傾向を強く感じます。安倍政権以降特に顕著となった歴史修正主義の台頭とともに加害に無自覚な日本人が作られ続けているように思われてなりません。

戦争遺跡はどんな小さなものでも国内で完結するものは一つもありません。東アジア近代史の中に位置付けることができなければその歴史的価値を失います。なぜ戦争遺跡がそこにあるのか、それが作られ使われた時代はどんな時代であったのか。戦争遺跡を前に想像力を働かせ二〇〇〇万人以上の東アシアの人々の命を奪い、塗炭の苦しみと恐怖に陥れた戦争に繋がっていることを想起させるものでなくてはならないと思います。戦争遺跡は最も身近にあって、地域と戦争の関わり、足元から戦争を考えることのできる「平和の砦」として位置付けていきたいと思います。

高知県南国市史跡　5 号掩体

日本平和学会秋季研究集会「平和と芸術分科会」での活動報告

福島在行（平和博物館研究会）

2021 年 11 月 7 日、同分科会で「平和博物館の見え方、感じ方を言葉にしてみる試み（その一）－広島平和記念資料館を事例として－」と題する企画をオンライン開催した（34 人参加）。内容は企画者・福島による導入報告、西村鈴（広島市立大学 3 年）、田中勝（広島市議会議員／現代美術家）、兼清順子（立命館大学国際平和ミュージアム）による広島平和記念資料館の見学報告、根本雅也（松山大学）によるコメント、そして全体討論で構成された。本企画では平和博物館でのモノの展示のされ方と見学者の受け取りに焦点を当て、広島平和記念資料館展示を対象とし、上記 3 人に自身の見学経験を言語化してもらった。3 者の社会的背景はそれぞれ異なるが、自身の個人史、家族史等と重ね合わせて展示を見学していることが示された。またモノへの焦点化を依頼した結果、現物展示への関心集中を招いた可能性もある。今後はワークシートの改善等を図りたい。分科会の報告案内とダウンロードは https://www.psaj.org/bunkakai202111/ を参照のこと。

海外でのウェビナーに参加して

山根和代（国際平和ミュージアム専門委員）

コロナ禍の巣籠状態の中、平和博物館関係のズーム会議やウェビナーに参加している。10 月 11 日にはアメリカのウィスコンシン大学で平和・正義研究学会があり、「平和のための博物館：歴史、記憶、変革の探求」（今後平和のための博物館国際ネットワーク(INMP)として出版予定の本の題名）というウェビナーで、他の筆者といっしょにパネリストとして参加した。10 月 22 日にはジョージア州ケネソー州立大学での歴史平和学会で「平和の

ための博物館：テーマ、主張、そして論争」に参加し、国際平和ミュージアムについて報告した。「異なった歴史観や考えを持つ人々に、どのように接したら良いのか」など、様々なことを論議した。10 月 27 日からモスクワで開催の国際会議にオンラインで参加し、平和博物館における平和教育について報告した。また 11 月 7 日には日本平和学会大会平和教育分科会で、「INMP の国際会議の歴史と課題」について報告した。
コロナ禍で生活が一変したが、今までよりは容易に海外、特にアフリカや南米、イランなどこれまで接する機会が少なかった人々と話ができるようになったのは、良い側面だと思います。

海外の平和のための博物館

ニュース

ひめゆり平和祈念資料館を訪問して

リリー・クムラ：Lily Kumura
（ハワイ在住）

私はアメリカに住むウチナーンチュ 3 世です。母方と父方の祖父母、どちらも戦前に沖縄から移住してきました。

2019 年にひめゆり平和祈念資料館を訪れるまで、ひめゆり学徒の体験を何も知りませんでした。アメリカ人として、学校で教わった歴史の中には沖縄で起きた地上戦のことは含まれてなく、壕の中で隠れている日本兵を看護していた若い女学生たちがいたことなどふれられていませんでした。

当時、壕の中で看護をしていた、今は年配の女性のビデオが思い出されます。その中で、彼女は、負傷した兵士の看護をした体験を語っていました。日本語の映像で、娘が訳してくれました。水も、食べものもない。重症化した負傷兵たち。彼女の語りは何とも痛ましいものでした。助けを叫び求める兵士やなす術のない若い女学生たちを思い浮かべると胸が痛みました。そして、ビデオの女性は、多くの女学生が手榴弾で自決したこと、崖から飛び降りたこと[1]、アメリカ軍の艦砲射撃によって亡くなったことを語っていました。体験者の言葉や持ち物を展示する以上に、戦争の悲惨さを伝える方法として、これほど力強く、有効な方法はありません。ひめゆりの展示は実物や写真がよくレイアウトされていて、戦争が終わりに向かう流れにつれ、その歴史や体験に吸い込まれていきました。

では、なぜすべての人にとってひめゆり平和祈念資料館のような場所を訪れることが重要なのでしょうか？

いままでにワシントン D.C.のホロコースト博物館や広島の博物館、最近ではひめゆり平和祈念資料館を訪れました。それぞれのミュージアムでは違うストーリーを語っていますが、戦争の恐ろしさを表現している点は共通しています。戦争は、一般人、戦闘員、どちらにとっても、無意味な苦しみや痛みを生み出します。アメリカ人として、戦争に勝者はいないという気づきを高めること、そして平和が広がりを望むことが求められていると気が付きました。ひめゆり資料館は、戦争から遠くなった若い世代へ、この悲劇を忘れてはいけないという真実への気付きを与えてくれています。ひめゆり資料館の功績に感謝して。

（翻訳：狩俣英美）

ひめゆり平和祈念資料館を訪問して

マリ・クムラ：Mari Kumura (INMP 理事)

私が学校に通っていたころ、いつも私は沖縄と日本のハーフなのと言っていました。「つまり日本人ってことね」という反応をよくされました。そうすると私は本土と沖縄の人がどう違うのかといい

[1] 資料館の証言映像では、飛び降りた生徒がいたということは言及されていません

う説明を付け加えていました。母方のおじいちゃんはハワイで生まれました。彼の家族は、ハワイで働いた後、沖縄に戻ろうと考えていたそうで、おじいちゃんがまだ赤ちゃんのころ、子どもたち全員が沖縄に戻っていきました。けれど、おじいちゃんが10代になると、全員でハワイに戻ることを決めました。第二次世界大戦がはじまる前のことです。

ハワイでは、おじいちゃんは繁華街にある非営利団体の司書として働き、おばあちゃんは専業主婦をしていました。ちなみに、おばあちゃんは沖縄に住んだことがありません。私の母やおじたちに聞かせたくない話をするときはいつもうちなーぐちで話をしていたそうです。母はその言葉を聞き取ることはありませんでしたが、常に沖縄とのつながりを絶ってはいけないと語っていました。ハワイ沖縄連合会が毎年沖縄系の若い世代を集めて、沖縄の文化を教えていて、私も毎年、夏には活動に参加しています。

私はまだウチナーンチュとしてのアイデンティティを心に抱いています。ハワイでウチナーンチュのつながりが強いこともあり、「ひめゆりとハワイ」展をさらに印象強くさせてくれました。ハワイ生まれの親泊千代子さんのことを読み、私の祖父母の人生と照らし合わさってみえました。私の祖父が人生の成功を夢見て生まれ故郷のハワイに戻ることを強く望んでいたこともあり、千代子さんが生徒たちに教えることをどれほど喜んでいたか想像すると、彼女とのつながりを強く感じることができました。彼女は私よりも年齢のいかない若い女性で、生徒がふさぎ込むことのないよう支えていました。

私たちの住む小さな島からでは、沖縄戦の悲惨さを知ることは難しいことです。しかし、2019年にひめゆり平和祈念資料館を訪れて、沖縄の南部で起きた残酷な出来事を深く知ることができました。

曲がりくねった高速を走り、道はとてもはっきりと見えました。日差しが照りつけ、所々に雲が広がる天気でした。午前半ばにひめゆり資料館に着き、入り口へと歩いて向かいました。人は少なく、両親と私は、標識はすべて日本語だけど、この海風を感じるとハワイにいるみたいだねと冗談っぽく話していました。資料館の建物は、きれいに整備された敷地につづく大きな木々と美しい石のゲートの奥に立っていました。最初の展示室に入るときは、中庭に並んだ花のおかげもあって、明るい雰囲気に包まれていました。

ひめゆり資料館に行く前に、立命館大学の平和ミュージアムやワシントン D.C.にあるホロコーストミュージアムなどいくつかの平和ミュージアムに足を運んだことがありました。ハワイでは、12月7日の恐ろしい体験や日本軍を押し返す努力についての話は聞いていました。歴史のクラスでは、太平洋の戦域での成功や軍司令部の優れた戦略を称えていました。そのことを振り返ると、私は戦争の実際の状況を配慮することができていなかったと思います。

資料館で当時の沖縄の子どもたちが迫りくる戦争の恐ろしさを知らずに学校に通っていたことを知り、驚きました。学徒の少女たちが着ていた衣服や、私が高校生のころと出会った生徒たちと何も変わらない少女たちの展示を見て、怖くなりました。迫りくる恐ろしい出来事を想像すらできなかった生徒たちの凍った顔に見つめられ、胸が苦しくなりました。ちょうど証言の映像上映が最初からはじまるときに、映像の部屋に入りました。壕の中で看護や清掃の活動をしつつも配給だけで生活していたこと、砲爆撃が飛び交う中で負傷者を海岸の壕にまで運んだことなど、生き残った彼女たちが語る辛い体験を聞いて衝撃をうけました。彼女たちがまだ子どもだったこと、私のいとこよりも幼いことを考えずにはいられませんでした。彼女たちにも、夢や憧れ、好きな子など、今の子たちが当たり前に抱くようなものがあったはずです。それらは日本軍が撤退を決めたために消え去って

しまいました。

日本軍が突然、女学徒たちの協力を必要としないことや、彼女たちがたたずむその場所で解散を告げたことを聞き、彼女たちの絶望感を私も一緒に感じました。彼女たちの行った全ての活動の後、壕から追い出されたのです。私の中で印象に残っている証言の一つが、アメリカ兵の捕虜にならないように、手榴弾を胸に押し当てていた友人を目撃した方の語りでした。証言映像の中で、今では歳を取った生存者が、友人が自分の周りで亡くなっていったこと、いかに自分が生き残ることを考えていたかという証言を語っているのを見て、涙があふれてきました。

映像の最後には、その部屋の空気が一変したように感じました。なぜ、私たちは、戦争の勝敗が重要ではないと考えることをためらうのでしょうか。軍事的な功績など関係なく、第二次世界大戦の本当の犠牲について考えることができました。罪のない男性、女性、そして子どもたちは苦しめられ、殺されました。アメリカ側と日本側、両方の語りを聞き、子どもたちを使い捨てにした事実を知って、戦争の勝ち負けの意味をあらためて考えさせられました。

資料館を出て、私の最後の思いは、ひめゆり学徒たちは何ひとつ間違ったことはしていないし、戦争に巻き込まれることも想像せずに、沖縄は日本の一部であると主張していた政府のために一生懸命働いた後に見捨てられ、日本の本島を守るための防波堤にされたことなど想像もできなかっただろうということです。事実、この戦争の犠牲者は、必要のない争いに巻き込まれた、この罪のない女性や少女たちです。

暖かい日差しの下に出て、この何気ない幸せをもう2度と感じることのできない子どもたちのことを考えて悲しい気持ちになりました。この資料館を見学して、世界中の戦争について考えさせられました。戦争は、善き人々が悪い人々を打ち負かすように描かれますが、結局は、そこには良いも悪いもありません。ただ犠牲者を生むだけです。何も罪のない人々の生活が変えられ、壊されるだけです。この考えは今でも私の心に残っています。その一方で、私はこんなにも大きな戦争が起きた時代に生まれなかったことに安心しています。また、狭い壕に隠れていた彼女たちを抱きしめ、彼女たちの命が記憶されていること、彼女たちが見ることのできなかった平和を、現代にもたらすための役割を担っていることを伝えてあげたいと思います。この世界を生きる人間として、どのような戦争であっても犠牲が生まれること、戦争が正しい答えではないという考えを導くために過去をしっかりと議論し合うことを胸に刻まなければなりません。（翻訳：狩俣英美）

強制動員被害者の証言展

金英丸（植民地歴史博物館）

植民地歴史博物館は、7 月から強制動員被害者の証言展「被害者の声を記憶せよ！強制動員歴史の歴史を展示せよ！」を行っている。この展示は、「明治日本の産業革命遺産」から消された強制動員・強制労働の歴史を被害者 19 名の生々しい証言を通して見せている。

強制労働の歴史を忘れるな

2015 年、明治産業革命遺産がユネスコ世界遺産に登録される際に、日本政府は戦時中に行われた強制連行・強制労働について「各サイトの歴史について理解できる戦略」として犠牲者を記憶する展示を行うことを約束した。しかし、2020 年 6 月に公開された東京の産業遺産情報センターには、強制動員に対して一切の展示が行われていない。
植民地博物館の展示では、高島・端島(軍艦島)炭鉱、三菱長崎造船所、八幡製鉄所など、明治日本の産業革命遺産の現場で働かされた朝鮮人をはじめ、中国人、連合国捕虜の強制労働の実態も観ることができる。今回の展示は、日本の「POW 研究会」、「岡まさはる記念長崎平和資料館」、「長崎中国人強制連行の真相を調査する会」からの協力を得て実現できた。平和のための博物館の日韓市民連帯によって実現できた意義深い展示でもある。

非人間的な残虐行為を記録するブラックボックス: 日本帝国陸軍 731 部隊による犯罪の証拠展示室

劉茹（研究員）

日本軍の中国侵略と太平洋戦争において、日本軍は 731 部隊を中核とする細菌戦システムを構築し、密かに人体実験と細菌戦を行い、凶悪な犯罪を行った。国民に戦争と平和について考え直すよう警告し、教育するために、1985 年の世界反ファシスト戦争勝利 40 周年を機に、日本帝国陸軍 731 部隊の犯罪証拠展示館が正式に設立された。
2015 年の世界反ファシスト戦争勝利 70 周年に、政府は新しい展示館を建設した。新展示館の建築は「ブラックボックス」と名付けられ、ブラックボックスをひねったようなデザインになっている。飛行機のブラックボックスは真実を記録するための容器であり、建築のデザインは「ブラックボックス」が 731 部隊の真実を記録することを意味し、「ブラックボックス」が開かれれば、731 部隊の真実が明らかにされることになるのである。"The Black Box "は半地下の建物で、内部には自然光が入らないため、黒とグレーで闇を表現している。建築は怒りを表現するのではなく、人類の文明と平和的発展の観点から歴史の真実を見てほしいと願っている。"The Black Box "は、アーチダイリー 2018 中国建築賞を受賞している。

ザ・ブラック・ボックス

「ブラックボックス」の内部は「非人間的残虐行為--日本帝国陸軍 731 部隊の犯罪証拠展示」をテーマに、731 部隊が細菌兵器を開発し細菌戦を行った犯罪証拠を展示している。展覧会は犯罪と犯罪証拠を核心的な内容とし、大量の犯罪遺物、歴史資料、口伝資料などを用いて、10050 点の犯罪遺物、8000 ページの人体実験報告書、1567 ファイルの「特別移送」、731 部隊の元隊員の 423 時間のビデオデータ、136 人の中国人労働者の証言、19 人の日本人戦争犯罪者の裁判記録などの証拠で成り立っている。これらの遺物や資料を通して、731 部隊が行った非人間的な残虐行為を総合的かつ客観的に展示している。観客は山ほどの犯罪証拠に囲まれた展示室を歩くと、まるで 731 部隊の分厚いファイルを読んでいるようで、その目的は観客に歴史の痛みを思い出させ、戦争と平和について考え直させることにある。

「ブラックボックス」の周囲には 731 部隊の跡地があり、731 部隊の跡地は世界最大の細菌戦の跡地である。終戦前、731 部隊には 80 棟以上の建物があったが、犯罪の証拠を隠滅するため、731 部隊は建物や施設を爆破して退却したそうである。現在、23 ヶ所の遺跡が保存され、面積は 25 万平方メートルで、主な遺跡は 731 部隊本部跡、細菌研究所と特別刑務所跡、ボイラー室跡、凍傷研究所跡、ガス研究所跡、ネズミ飼育室跡、焼却炉跡などである。これらの現場は、まさに 731 部隊の犯罪を記録している。

731 部隊本部跡

政府は長年にわたり、731 部隊の跡地を保護し、世界遺産に申請するために努力してきた。2006 年、731 部隊跡は国家保護設備に指定され、2011 年には中国の世界遺産登録申請地に登録された。遺跡の保護と展示を通じて、観客に戦争遺跡を身近に感じてもらい、直接犯罪の証拠を直視してもらい、観客に戦争と医学、戦争と人間性、戦争と平和について深く考えさせるようにするのである。

731 展示館は国家教育基地として、「歴史を忘れず、平和を大切にし、未来を創造する」というテーマで教育活動を行うことにこだわり、歴史の目撃者と被害者を招いて活動を行う。例えば、靖福和さんはハルビンで 731 部隊がペストを蔓延させた被害者で、張聖鴻さんは湖南で 731 部隊が細菌戦を行った目撃者で、彼らは長年にわたって 731 展示館でボランティアを務め、自らの体験を語ることによって、観客に戦争の残酷さと平和の価値を知らしめたのである。

731 展示館は積極的に学校と協力して教育活動を行い、70 余りの学校と協力関係を結んでいる。例えば、731 展示館は黒龍江国際大学と協力し、平和資料館と平和講座を設立し、「戦争-記憶-平和」をテーマにした展示を行い、大学で平和をテーマにした講義を開催している。様々な形の教育活動を通じて、学生に戦争と平和について再考するよう指導している。

731 展示館は、市民平和団体と積極的に協力している。2015 年、退職した従業員で結成された「八方平和芸術団」が正式に 731 展示館のボランティア公演団体となり、「731 部隊の歴史は忘れられない」という歌を作曲し、何度も地域で公演を行った。2015 年 9 月、731 展示館は日本の「悪魔の大食合唱団」をハルビンに招き、ハルビンコンサートホールで「八方平和芸術団」との合同公演を開催し、双方は合唱という形で「歴史を忘れず、平和を大切に」という声を共同して伝えた。

731 展示館は戦争記念館の一員として、「歴史を心に留め、過去を忘れず、平和を大切にし、未来を創造する」という精神を実践し、戦争遺跡の保護、

戦争の歴史の記録、戦争の記憶の普及、平和教育の推進などの責任を担っている。731 展示館が設立されてから 30 年余り、1 千万人余りの人々が訪れている。最近、「Covid 19」の影響で、731 展示館は積極的にオンライン活動を組織し、訪問者はウェブサイト上で展示を見学し、教育活動に参加することができる。政府の指導の下で、731 展示館は引き続き現場の保護、展示、学術研究などの仕事を強化し、積極的に平和教育の役割を果たすつもりです。

「平和のための博物館」というコンセプトは、紛争地域でも通用するのか？タイの奥地からの答えを探る

平和博物館研究者　パッポーン・ポウトン

平和博物館のコンセプトは、平和プロセスにどの程度貢献しているのか、また平和教育のツールとして利用できるのか。平和のための博物館は、戦争や紛争、植民地化の歴史を伝え、人々が記憶し、学び、批判し、残虐な行為が再び起こらないようにするという重要な役割を果たしているが、平和のための博物館のコンセプトは、現在進行中の紛争解決にも適用できるのだろうか。私は 2011 年に平和のための博物館に関する実地調査のために日本に滞在していたとき、そして 2017 年に北アイルランドのベルファストで開催された「平和のための博物館に関する国際会議」で再びこれらの質問をした。答えを得るまでにはさらに数年かかったが、2019 年には「暴力紛争における平和教育」という研究プロジェクトを開始した。タイ科学研究イノベーションの助成を受け、「タイ南部辺境州における平和博物館の可能性を探る」という研究プロジェクトを開始した。この研究では、人々が平和のための博物館とは何かを理解すれば、自分たちの闘争やニーズ、希望を伝えるための社会政治的なツールとして、また一般の人々に平和の呼びかけに参加してもらうために、博物館をどのように利用するかを想像することができるということを学んだ。

タイの深南部の紛争は、パタニ、ヤラ、ナラティワートの 3 県とソンクラー県の 4 地区で構成されている。この地域の住民の大半はイスラム教徒で、マラーユ・パッタニー語を話し、独自の文化的アイデンティティを持っている。この調査は、この地域が近年暴力的な状況に戻ってからの 17 年間に、この地域の人々がどのように直面し、どのように感じ、どのような状況に接してきたのかを理解しようとすることから始まった。Deep South Watch によると、2004 年 1 月から 2021 年 11 月までの間に、21,235 件の暴力事件、7,111 人の死亡者、13,266 人の負傷者が出ている。領土、自治権、不平等、天然資源、傷ついた歴史、宗教的・文化的アイデンティティなどが地元民の大きな関心事となっているが、政府はこれらを国家の安全保障に関わるものと考え、軍事介入を主な手段としている。

本研究では、学術機関や市民団体ではなく、紛争の影響を受けている人々の視点から平和のための博物館についての認識を得るために、農村部や紛争地域の村人、教育システムからドロップアウトした若者など、資源へのアクセスが限られ、意思決定から排除されている現地の人々の声に焦点を当てた。

この地域の人々にとって、「ミュージアム」という言葉は目新しいものではないが、彼らの生活はミュージアムから遠ざかっており、ミュージアムを訪れたことがない人も少なくない。同時に、「平和」という言葉は抽象的なものとして認識されており、人々は日常生活の中では使わない言葉であった。「平和」よりも「正義」「平等」「自決」といった言葉が好まれていた。ワークショップで「平和のための博物館」の説明を受けた村人たちは、博物館を建物や展示物、コレクションとして捉えるのではなく、政府や軍、タイ深南部以外の人々

など、自分たちが最も聞きたい対象者に自分たちの声を直接伝えるためのツールとして捉えている。彼らは、深南部に博物館はいらないし、深南部の人々が互いにコミュニケーションをとる理由もないと考えていた。自分たちの声が、自分たちの領域を超えて届くことを望んでいるのだ。彼らの反応は、博物館が権威主義に立ち向かうために利用できることを村人たちが理解し、より多くの人々からの支持を期待していることを示している。

紛争が続いている中で、暴力を様々な形で表現したり、被害者の声を伝えたり、歴史や経験の異なるバージョンを紹介したりすることは、必ずしも相互理解につながるとは限らず、かえって新たな紛争を引き起こす可能性がある。そのため、紛争地域の外に平和博物館があることは、村人同士、あるいは村人と当局との間の紛争を減らすのに役立つという指摘があった。

また、博物館の立地が人々の認識や感情に影響を与え、虐殺事件や大規模な自治に関する考え方などのデリケートな問題を提示したり伝えたりすることで、博物館が軍や当局、レジスタンスグループの標的になるのではないかという懸念もある。しかし、もし博物館がディープ・サウス以外の地域に設置されたとしたら、そのシステムや構造に疑問や批判が生じるだろう。

また、「自決について公に議論することは許されていないが、人々がなぜそのように考えるようになったのかを学び、理解を深めるためには、少なくともこのデリケートなテーマについて議論する場が必要だ」という村人たちの指摘から、平和博物館は学問的自由を実現することが期待されている。

紛争地域に住む村人たちにとって、平和のための博物館は、自分たちの物語や経験を展示する場所ではなく、何をどのように伝えるかを決定し、デザインする人、そして主な対象者である自分たちを見る場所なのである。また、博物館が独立したものであること、イスラム教徒と仏教徒の間など、異なるコミュニティ間のバランスを保つことも期待された。

最後に、平和のための博物館には、軍人や権力者、抵抗勢力などを含めた「人間の尊厳」を期待し、他者がどこから来たのかをよりよく理解することにつながるとした。

経済や紛争の影響で若者の移動が比較的多いパタニ県の小さな農家の村。

米、ゴム、サトウヤシ、ココナッツなどが深南部の経済作物であるが、労働力不足のために多くの水田が放棄されている。

アフリカの子ども兵士のコミュニティ博物館の物語

ロムダック・オケチ: Lomudak Okech

「アフリカの子ども兵士のコミュニティ平和博物館」設立者／INMP 諮問委員

アフリカの子ども兵士のコミュニティ博物館の物語は、土壁を作り、草を束ねて茅葺き屋根を作

ったのと同様に、私の物語でもあります。このように、私は子ども兵士としての人生の物語を平和博物館の物語に織り込んでいます。

私が 11 歳のとき、反乱軍が平和な村を襲い、銃口を向けて私を誘拐しました。今でも、母の叫び声が聞こえてきます。「私の息子から離れてください。彼はまだ子どもなのよ。代わりに私を連れて行って 」と。彼らは私をジャングルの奥地にあるブッシュキャンプに連れて行き、殺しの訓練をしました。それから 7 年後の 1993 年のある日、私はスーダン政府軍とスーダン人民解放軍（SPLA）のゲリラ部隊との激しい戦闘から逃れたのです。私は銃を持って野原に逃げました。子どもの体より重い AK47 でした。14 日間、野生動物や蛇、サソリ、反乱軍を避けながらブッシュを歩き回りました。私と同じように逃げてきた他の 2 人の子ども兵士も私に加わりました。飢えと渇きに苦しみ、疲れきっていました。そんなある日、一人が自殺を考えていたときに、国連のトラックを見つけました。 彼らは私たちをステーションに連れて行ってくれました。その後、私は母の行方を探しました。母もまた、マグウィという村から逃げてきたのです。国連は私たちをウガンダのアチョイ・ピイという難民キャンプに連れて行ってくれました。私は自由になったのです。その日、私は「誰の子ども時代も奪われてはならない」と誓いました。その誓いを守るために、私は難民としてカナダに渡りました。

2014 年、私はケニアのコミュニティピースミュージアムの創設者であるスルタン・ソムジー博士と出会い、村に平和博物館を作るというコンセプト、目的、戦略について話し合いました。それから 3 年が経ちました。私は、ソムジー博士が私に平和博物館を設立するためのトレーニングをしてくれていることに気づきませんでした。 そこで私は、インターネットを使って、村の子ども兵士たちに平和博物館を作ることを相談しました。子ども兵士のものである平和博物館のアイデアは、まさに私たちに希望を与えてくれました。私たちの多くは、すべてではないにしても、深いトラウマの二日酔いを抱えながら、日々を生きています。

2018 年、私たちは活動を開始しました。ソムジー博士が最初の寄付をしてくれて、私たちはレンガを買いました。2 人の元子ども兵士が、レンガの積み下ろし、運搬、保管をボランティアで行ってくれました。 計画は地面にスケッチされ、腰の高さの円形の壁が作られましたが、私たちはさらなる資金を待っていました。2018 年には、2 人の元チャイルド・ソルジャーを含む 9 人の有能なコミュニティの人々を集め、ボードを作りました。私はバンクーバーでケアワーカーとして 2 つの仕事をしてお金を貯め、ポールを買いました。屋根のフレームのために取り組んだのです。雨が降るのを待ち、屋根を葺くのに適した大きさと強さのアビイと呼ばれる草が育つのを待つ間、約 1 年間、壁は円形の井戸のように盛り上がっていました。そして、2020 年にキンバリー・ベイカー博士が茅葺きのための資金を寄付してくれました。そして、元子ども兵士たちが円形の壁の上に枠を作り、茅葺きが始まりました。児童兵のための、児童兵による平和博物館を作るという私の夢は、今や現実のものとなりました。子ども兵士たちは尊敬の念を抱きました。彼らは自分たちの物語を語り、平和を築き、40 年の歴史を持つ紛争国の平和を主張する場所を見つけたのです。

コミュニティは物質的な文化を示すものを寄付し、私たちは戦闘中に殺されたり、誘拐されたりして家に帰れなかった子ども兵士たちの写真を集め始めました。現在、地元のアーティストと話し合っており、絵の具と労働力のための資金ができたら、土壁に 5 枚の壁画を描いてもらうことにしています。絵には、子ども兵士の誘拐、ブッシュでの生活、脱出、家族との再会などが描かれる予定です。他にも、アチョリ族の伝統的な和解の儀式である「マト・オプト」や、アチョリ族の文化で「アン・ロコリ」と呼ばれる平和の概念を描いた

ものもあります。アンロコリには平和の 5 つの顔があると言われています。ジョジョク・アマロ（至高の存在）、キトギ（自然）、ルディト・パキュ（長老）、クワレワ（祖先）、ドゥル・マ・オグレ（共同体）です。私たちは、物質的な文化、壁画、口承による物語を使って来館者に語りかけ、地元の学校を訪問して平和教育を行う予定です。

アフリカの子ども兵士のコミュニティ博物館の重要な特徴は、ワングーです。これは、子ども兵士とコミュニティが輪になって座る伝統的な集会所で、多くの場合、夕方に火を囲んで、紛争や平和構築、和解などの問題について話し合う場です。民族誌学者のソムジー博士は、アフリカの平和博物館では、対話や口承の習慣を維持するためにワン・ウーは不可欠なスペースだと主張していました。確かに、ワン・ウーでは、歌や平和の物語に込められたことわざやたとえ話、なぞなぞなどを競って話します。アンロコリーは、アフリカ東部ではウツ、南アフリカではウブントゥとも呼ばれる汎アフリカ的な概念です。ネルソン・マンデラ氏は、このアフリカの哲学を用いて、アパルトヘイト政府の恐怖と折り合いをつけるための「真実と和解」プロジェクトを開始しました。ソムジー博士は、私たちの平和博物館のワン・ウーの費用を負担することを約束し、それを模範として、展示を完成させるための寄付活動を開始しました。

アフリカの子ども兵士のコミュニティ博物館は、資金があれば少しずつ作られていきます。泥レンガもアビイ草も、熱帯の風、雨、太陽が母なる自然の癒しの手を借りて、平和と復興を目指すアフリカの子ども兵士たちの物語を歌うのです。

モバイルアプリが生徒の学習コンテンツへのアクセスと気候変動の緩和をどのように支援しているのか

ティモシー・ガチャンガ：ナイロビ

2019 年 3 月 13 日にケニアで COVID-19 が初めて報告されると、小学校から専門教育まで、あらゆるレベルの教育が混乱し、オンラインに移行せざるを得なくなった。大学を含む多くの学習機関は、オンラインや遠隔学習という学習形態に対応できていなかったのである。オンラインにシフトできなかったところは、無期限の閉鎖を余儀なくされた。中には、学習再開の方法を見出すのに 1 年以上かかったところもあった。

また、インターネットへの接続も課題であった。教育用ポータル、Moodle、Zoom、Google Meet の使い方をスタッフと生徒に教えなければならなかった。オンラインにするためには、教師と生徒のインターネットへの接続を束ねる必要があった。イギリスの会社 Cable.co.uk によると、1GB のインターネットのために 240 ドル（2.25 米ドル）かかるそうで、これは多くの人にとって高すぎて手が出なかった。

私はこの時期、大学で 2 つのコースを教えていた。学校が休みになったとき、どうやって授業を

続けるか、どうやって接続の問題があっても学生が学習コンテンツにアクセスできるようにするか、考えなければならなかった。
こうした課題を解決するために、私は「紛争解決と変革のためのツールキット」と「平和と紛争報告のためのツールキット」という 2 つのモバイルアプリを開発し、学習者が学習コンテンツにアクセスできるようにした。学習者は自習用にアプリをダウンロードし、私はインターネットにアクセスできない学習者のために WhatsApp や SMS で接続した。

紛争解決と変革のツールキットアプリは、学習者に紛争解決と変革の分野の基本的な理解と、これらの概念がどのように平和構築に実際に適用されるかを提供することを目的としている。11 のトピックを取り上げ、紛争の性質からその分析、調停、対話、修復的正義、紛争後の復興に至るまで、理論と実践の両面をカバーすることを目的としている。

平和と紛争報告ツールキット」は、紛争状況下での報告について学びたい方を支援するために作成された。また、このアプリは 11 のトピックをカバーしている。社会におけるメディアの機能、平和ジャーナリズム、平和ジャーナリズムの基本ルール、平和プロセスに関する報道など、11 のトピックを扱っている。

ツールキットを通じて、学生は録音された講義を聴いたり、ビデオを見たり、講師が Google フォームで課題を与えたり、学生がケーススタディやジャーナル記事にアクセスしたりすることができ、以下のようなことが可能である。
コラボレーション Wiki、ジャーナルライティングなどの共同作業。

既存の大学のウェブサイトに教材をホスティングするのではなく、アプリを作成することで、ケニアにおける携帯電話の普及率と若者のソーシャルネットワークへの依存度の上昇を考慮に入れている。Deloitte Kenya によると[1]、スマートフォンの普及は加速し続けており、ケニアは現在、世界でも有数の普及国となっている。このため、企業には、サービス提供をモバイルファーストに転換することが求められている。

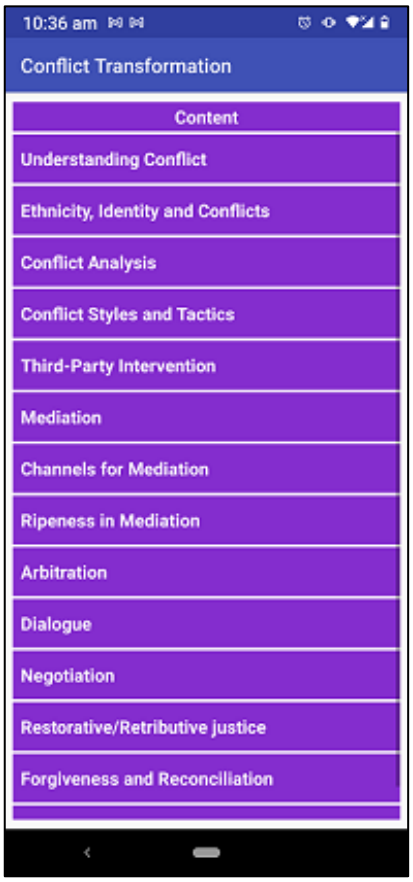
モバイルアプリを開発することで、学生はオフラインでどこにいてもコンテンツの多くをダウンロードしてアクセスでき、他のプラットフォームでホストされているコンテンツをストリーミングする際にのみ接続を必要としている。また、コンテンツの更新も簡単にできるようになった。

このアプリは、主にセッション中に私が教えていた学生が使うことを想定していたが、その範囲ははるかに広くなっている。Google Play Store の統計によると、世界中のさまざまな国の 900 人以上の学生が「紛争解決と変革のためのツールキット」をダウンロードし、積極的に利用していることがわかる。

COVID-19 はこのイノベーションのきっかけになったが、気候変動もアプリ開発の動機になった。講師陣が苦境に立たされる中、大半の講師は学生にノートを送って読んでもらうという伝統的な指導方法に頼っていた。しかし、ネットで読むにはお金がかかるため、多くの学生はノートを印刷するようになった。その結果、紙の使用量が増え、森林伐採につながったのである。森林破壊は、気候変動の主な原因である。私のイノベーションは、大学での教育における紙への過度な依存を減らすことで、気候変動を遅らせようとするものである。

ケニアの大学では、毎日膨大な量の紙が使われている。大学教育委員会（CUE, 2019）によると、ケニアの大学には 454,826 人の学生が在籍し、15,186 人の講師がおり、大学で提供されているコースは 5,113 コースある。学習モジュール、ノート、試験冊子の作成に使用される紙の状態を数値化すると、膨大な量になる。これが、国内の森林面積の減少に寄与しているのである。

1963 年にケニアが独立したとき、国土の 10%が森林に覆われていた。それが、炭焼き、製紙、木材生産、農業の拡大、無秩序な伐採、都市化などの結果、2009 年には 6%にまで落ち込んでしまったのである。これは気候変動の原因となっただけでなく、土壌侵食、洪水の増加、干ばつ時の淡水の利用可能性の劇的な減少の原因となっている。



このアプリは、ペーパーワークをなくすのである。モジュールを印刷する代わりに、学生は携帯電話でコースをダウンロードするだけでよいことになっている。

2021 年 11 月、私のイノベーションは、他の 25 のイノベーションとともに、アフリカで報道されないで起きている革新的な教えの一つとして評価された。報告書はこちらからダウンロードできる。アフリカの大学でデジタルコンテンツを作成し、デジタル学習を提供している。

また、University World News に掲載されたこの短い記事もお読みください。革新的な教育が行われている - 多くの場合、サポートされていない例

[1] グローバルモバイル消費者調査。ケニアの切り口 https://www2.deloitte.com/za/en/kenya/pages/about-deloitte/press-releases/deloitte-releases-2019-report-on-kenya-s-mobile-consumer-behavio.html

デイトン国際平和ミュージアム

サルマ・アルベズレ: Salma Albezreh

デイトン国際平和ミュージアムは、1 年以上前から変化の波に乗り、待望の新ビルへの移転を果たしました。アイザック・ポラック・ハウスと呼ばれていた元の建物は、9 月末に売却されました。美術館は 2004 年に設立されましたが、アイザック・ポラック・ハウスは 1877 年に建てられた歴史的建造物で、国家歴史登録財に指定されています。この家は 17 年間博物館に貢献してきましたが、最初の家が手狭になったのです。

デイトンのダウンタウンにあるコートハウス・スクエアの新しい場所には、独自の歴史があります。1850 年に完成したこの建物は、ギリシャ・リバイバル建築の最も優れた例のひとつとして認められています。エイブラハム・リンカーン、ジョン・F・ケネディ、ウィリアム・J・クリントンなど、9 人のアメリカ大統領がこの階段で選挙活動を行いました。また、歴史的にも集会や地域の発表の場として利用されてきました。

新スペースはデイトンの中心部に位置し、旧博物館の 3 倍の展示スペースに加え、スタジオ、カフェ、ステージ、キッズルーム、専用教室などがあります。この 1 年の多くは、北側のラドロー通り 10 番地への移転作業に費やされ、多くの地域住民の方々が直接、あるいはオンラインでボランティアとして支援してくださいました。工事は完成に近づいています。

国際平和デーのために、博物館は未完成の新しい博物館内で集会を開き、「ワールド・ハウス・クワイア」という合唱団の生演奏でお祝いしました。ワールド・ハウス・クワイア」とは、キング牧師が「人類は互いにつながった一つの大きな家に住んでいる」と表現したことにちなんでいます。ゲストスピーカーとして、2019 年の銃乱射事件で父親を亡くしたディオン・グリーンさん、デイトン市のナン・ホワイリー市長、ジャック・ミーガー判事、博物館のケビン・ケリー館長が登壇し、大勢の聴衆に向けて挨拶をしました。

博物館は、アーティストのレイ・ズップ氏とトリスタン・カップ氏のデザインを参考に、新しい子供部屋では、子供たちが動物に対する自然な好奇心や愛情を通して、優しさや共感を探求する機会を提供します。この部屋には、本、インタラクティブなゲーム、おもちゃ、そして動物が登場する多くの物語が用意されています。また、毎年恒例の子供向け夏季ピースキャンプの計画を立てるためのミーティングも行われました。ウェンデル・ベリーの平和の詩も、子どもたちのスペースに使われる予定です。

2021 年 11 月は、1992 年から続いたボスニア紛争を終結させた 1995 年の「デイトン和平合意」から 26 年目にあたります。デイトンでは、戦争をしていた 3 つの国が指導者を派遣し、数週間にわたる紛争解決に参加した後、最終的に合意が交渉され、戦闘が終結したのです。

同博物館の「平和協定」の展示は、AASLH（アメリカ州・地方史協会）の優秀展示賞を受賞しました。また、同博物館では、インタラクティブな また、Covid-19 への対応として、自宅から誰でも見ることができるインタラクティブなオンライン展示を公開しました。この展示では、ストーリー、ビデオ、写真、音楽、教育用マップなどを備えたインタラクティブなキオスクが用意されており、戦争の現実と平和に向けた困難な道のりについて考え、学ぶことができます。博物館の常設展示として、博物館のルーツと構想、そして永続的な活動を常に思い出させてくれます。

ミュージアムの常設展示として、ミュージアムのルーツと構想、そしてコミュニティにおける平和の永続的な遺産とそれを維持する私たちの責任を常に思い出させてくれます。

この平和協定の展示を担当したメアリー・レイミー博士は、9 月に交換プログラムでデイトンを訪れたボスニアの高校生 20 人と面会しました。また、スレブレニツァ・ジェノサイド・メモリアルや、新たに設立されたキエフ・ピース・ミュージアムとも提携しています。

さらに、博物館はオーストリアの海外奉仕プログラムと協力して、毎年 2 名のオーストリア人学生をスレブレニツァ・ジェノサイド・メモリアルとデイトン国際平和博物館でインターンさせています。一人はオーストリア・セルビア人、もう一人はオーストリア・ボスニア人の若者ということもあり、世界的に関心が寄せられています。最初の学生は 1 月に到着する予定です。ノースウェスタン大学のサマーインターンが、米国における学生の抗議活動の歴史を振り返る 4 分間のビデオを制作しました。

博物館がいよいよオープンするときには、地域の方々に以下の展示物をご覧いただき、考えていただくことになります。

〇デイトン和平合意の物語。
〇ガンジー・オリジナル写真集
〇平和の迷宮（The Peace Labyrinth）
〇Peace Builder's デジタル展示

〇学生の活動の歴史
〇芸術で平和を築く
〇ピースポール。地元アーティストによる 12 フィートの作品

MLK カラー写真集は、新ビルでの最初の臨時展示として 2 月から 4 月まで開催されます。キング牧師の人生とアメリカ横断の旅を 45 枚のカラー写真で紹介します。現在 80 歳になろうとしている写真家を招き、この歴史的な物語を撮影した感想や経験について語ってもらいます。

また、広島の被爆者の木の苗木が博物館に到着し、成長して展示されることを楽しみにしています。関連して、8 月には 2 回目の原爆記念式典を Facebook のライブ配信で行い、平和構築の仕事がなぜ存続しなければならないのかを厳粛に思い起こしました。

当館はここ数週間、平和と教育を目的とした仲間たちと、直接会ったり、オンラインで交流を深めてきました。12 月 10 日には INMP とミラノ大学の平和博物館会議、9 月にはケント州立大学の平和教育会議で、ケビン・ケリー事務局長が講演を行いました。また、最近ではデイトン大学の人権会議で司会を務めました。

デイトン国際平和ミュージアムは、世界の多くのコミュニティと同様に、この 1 年で変化に見舞われました。それぞれのコミュニティが回復力と優しさを示す中で、デイトン国際平和ミュージアムは、平和の道を歩むすべての人々に希望とインスピレーション、そして象徴的な変化を提供したいと考えています。

デイトン平和協定の展示

移転先の新ビル周辺

小さなものから大きなものへ：ANMP の紹介 平和のための博物館の オーストラリア・ネットワーク

エヴァ・ロドリゲス・リエストラ：
Eva Rodriguez Riestra

この記事は、新たに結成された「平和のための博物館のオーストラリア・ネットワーク」(Australian Network of Museums for Peace)を支える人々、アイデア、プロジェクトを簡単に紹介するものである。

平和ポスターの重要なコレクションを救出しようというささやかなアイデアから始まったこのプロジェクトは、平和活動における博物館の役割を活発かつ厳密に検討し、平和博物館のアイデアを拡大し、平和と社会正義に関連するコレクション、博物館、トレイル、場所を結びつけるネットワークを構築するという素晴らしいものになった。

私たちは、オーストラリアのための新しい平和博物館の創設は、楽観主義と回復力の表れであり、平和的な活動の一形態として、私たちのコミュニティや社会に長期的に良い影響を与えることができると信じている。

ジョイス・アプセル著『平和博物館の紹介: Introducing Peace Museums』によると、平和博物館は、平和の文化や歴史に焦点を当て、反戦や

反暴力のメッセージを含む内容や活動を行う、独特な博物館のグループである。その形や規模はさまざまだが、平和が人類の歴史の中で継続的かつ重要な役割を果たしていることを理解し、促進するという目的は共通している。

平和博物館は、ポスター、美術品、バナー、嘆願書などの平和の物質文化や、非暴力、軍縮、紛争解決を促進する反戦運動や社会正義運動の保管場所である。

平和博物館は、複雑でほとんど知られていない、あるいは無視されてきた平和の歴史を明るみに出すのである。

私たちのプロジェクトは、シドニー大学平和・紛争研究センターのマッキービルにあった「平和ギャラリーのためのポスター: Posters for Peace Gallery」が解体された後に考えられた。このギャラリーは、世界に正義を持った平和の文化を想像するための物理的な空間を提供し、暴力の文化への抵抗の場を提供し、人権、非暴力、和解を通じて平和の文化を創造する可能性についての対話と教育の場を提供することで、学者と活動家のコミュニティを支えていた。

ギャラリーが閉鎖され、マッキービルの壁からポスターが取り外されたことで、コミュニティや学生のインスピレーションや活動の重要な拠点が失われた。新しい場所を探す努力をした結果、ポスターのほとんどはホームブッシュにある創価学会インターナショナル（SGI）オーストラリア・コミュニティ・センターに再掲された。ポスターは無事であったが、かつてのギャラリーの教育的、社会的、インスピレーション的な側面をさらに拡大し、より多くの人々と共有したいという願望が続いていた。

私たちの最初のプロジェクトは、ポスターをデジタル化して、より多くの人に見てもらうと同時に、将来の世代のために画像を保存することであった。同じ頃、平和・紛争研究センターの元メンバーが、オーストラリアに平和博物館を作るという提案をしていたが、物理的な場所を見つけるのに苦労していたため、バーチャルな平和博物館を作るというアイデアが出てきたのである。

2020 年 2 月、ニューイングランド大学はシドニーで「平和・紛争・ガバナンスを再考する: Rethinking Peace, Conflict and Governance」と題した会議を開催した。 この会議で、山根和代が「平和のための博物館における平和・人権教育」という報告をしたことがきっかけとなり、オーストラリアに平和博物館を設立することが検討され、ワーキンググループが設立された。

Covid19 によるロックダウンは 2020 年 3 月に始まったが、ワーキンググループはオンラインでのみ会合を持ち、ズーム技術を活用して定期的に会合を開き、相互支援的で魅力的な議論を行い、プロジェクトを存続させ、いくつかの刺激的な学会発表を行った。 パンデミックによってもたらされた制限と機会は、ミュージアムのアイデアの開発に影響を与えた。私たちは、多くの博物館が数ヶ月間、直接来館者を迎えることができなかった後、その存続に苦労している様子を目の当たりにした。また、ある博物館は巡回展に移行し、他の博物館はバーチャルなデジタルプレゼンスに焦点を当てているが、常に将来的にはよりインタラクティブな物理的博物館の体験に戻ることを望んでいるという話も聞いた。

私たちは、これらの制限を受け入れ、博物館をネットワークとして、また既存の平和のためのスペースにも広がるバーチャルな空間として確立するというビジョンに結びつけることに刺激を受けた。 いつかは ANMP の一部を従来の建物に収容することになるかもしれないが、仮想空間としてスタートすることで、文字通り既成概念にとらわれず、教育、抵抗、平等、アクセスというアジェンダを大いに強調することができると考えている。

バーチャルな "家 "のロジスティックスに取り組む一方で、リビング・ピース・ミュージアムや

ピース・トレイル（平和の足跡）のコンセプトなど、ダイナミックな空間を含むアクティブなプロセスとしての平和に関する対話を促進するために、さまざまなイニシアチブに参加している。2020 年、私たちのグループは INMP 会議に参加し、2 つの共同論文を発表した。正義をもって平和を視覚化する。抵抗、教育、対話の物語」と「平和のための空間を通じた平和の文化の構築」である。また、個人論文として、リンゼイ・メル氏の『普遍的なエートス』とピーター・ハーレイ氏の『明日忘れないように』の 2 本を発表した。ピーター・ハーボーン氏は「オーストラリアのための平和の道」について報告した。　会議終了後、ANMP ワーキンググループのメンバーであるフランク・ハッチンソンとエヴァ・ロドリゲス・リエストラの 2 名が INMP にアドバイザーとして参加し、ニュースレターなどの INMP の取り組みに貢献している。また、ANMP ワーキンググループのメンバーであるピーター・ハーボーンが、オンラインのオーストラリアの生ける平和博物館（ALPM）の理事に選出された。ALPM は現在、新しいオンライン展示に取り組んでおり、ウェブサイトのアップグレードも行っている。

2021 年 9 月には、Raising Peace Festival https://raisingpeace.org.au の支援に携わった。平和のための国際ボランティア（IVP）、平和と自由のための女性国際連盟（WILPF）、独立平和オーストラリア・ネットワーク（IPAN）が主導したこの 11 日間のオンライン・フェスティバルは、平和と、平和のために活動する人々や組織を称えるものであった。 ANMP のメンバーは、このフェスティバルのイベントを企画するグループの一員として参加した。クロージング・パネルでは、ANMP のメンバーであるアン・ノーナンとエヴァ・ロドリゲス・リエストラが、他の多くの主要なスピーカーとともに、オーストラリアにおける平和運動の将来について考えた。

2021 年 11 月には、ANMP のワーキンググループメンバーであるエヴァ・ロドリゲス・リエストラが、INMP のウェビナー「芸術と平和: Artivism: Art and Peace」に参加し、公共空間でのアートが平和と社会正義に貢献する方法を考察した。

最近では、イタリアのミラノで開催された会議「平和の足跡：歴史、記憶、コミュニケーションの間で: Trails of Peace: between history, memory and communication」のために、ANMP のメンバーであるニーナ・バリッジとアン・ヌーナンが、リズ・ボーエンとウェンディ・ランボーンのサポートを受けて、革新的なプレゼンテーションを作成し、オンラインで公開した。プレゼンテーションは、シドニー湾の入り口に位置するノースヘッドの旧検疫所で撮影されたビデオ映像と画像で構成されており、病気と健康、拘留と差別、戦争と平和といったテーマを絡めて、この歴史的な場所のストーリーを語っている。

会議に提出したビデオは、ピーストレイルの一例として紹介され、アボリジニの遺産の重要性と、私たちが「国」の管理者として、お互いや自然・建築環境と平和な関係を築いていくための教訓を強調している。

ANMP のメンバーであるフランク・ハッチンソンは、様々なプレゼンテーションやイベントのサポートに尽力し、インスピレーションを与えてくれた。彼はいつもカメラの前にいるわけではないが、他のメンバーと共にミーティングに貢献

し、私たちを前進させてくれた。

小さなチームの仲間意識と責任感が私たちを支え、そう遠くない将来、オーストラリアに平和博物館を建設するというビジョンを実現できることを楽しみにしています。

参考文献とリンク

〇Apsel, Joyce Introducing Peace Museums Oxon and New York: ラウトレッジ、2016 年

オーストラリア平和博物館ネットワーク（ANMP）ウェブサイト（保有ページ）
https://australiannetworkofmuseumsforpeace.com/

〇INMP 2020 年会議共同論文
正義をもって平和を視覚化する。抵抗、教育、対話の物語
https://sites.google.com/view/inmp-2020/p72-visualising-peace-with-justice-narratives-of-resistance-education-and?authuser=0

〇INMP 2020 会議共同論文：平和のための空間を通じた平和の文化の構築。オーストラリアのための平和博物館の創設
https://sites.google.com/view/inmp-2020/pn79-building-cultures-of-peace-through-spaces-for-peace-the-creation-of-a

〇Lindsay Mell による INMP 2020 会議の個人論文「普遍的なエートスを目指して」
https://sites.google.com/view/inmp-2020/p61-towards-a-universal-ethos?authuser=0

〇INMP 2020 会議 個人論文 ピーター・ハーボーン「明日を忘れないために オーストラリアのための平和の道」
https://sites.google.com/view/inmp-2020/p12-cities-for-peace/p14-lest-we-forget-tomorrow-peace-trails-for-australia?authuser=0

〇2021 年レイジング・ピース・フェスティバル
https://raisingpeace.org.au/

ポスターズ・フォー・ピース ギャラリー会議 2014 年

〇レイジング・ピース・フェスティバル クロージング・パネル「オーストラリアにおける平和運動の将来について」
https://www.youtube.com/watch?v=nYgQJ2BOUNE&t=1s

〇INMP ウェビナー2021 Artivism: アートと平和
https://inmp-gallery.museumsforpeace.org/art-peace-webinar

〇ANMP プレゼンテーション Art + Peace and Social Justice in the public domain
https://www.youtube.com/watch?v=P9VRrEyb6YY

〇会議 2021 平和の軌跡：歴史、記憶、コミュニケーションの間で
ANMP presentation Pandemic to Peace building - creating cultures of peace as the new normal starts at 8 hours 56 minutes
https://www.youtube.com/watch?v=MR8OK9bIXbQ

反戦博物館としてのベルリンの全貌

フィリップ・ゾンタック: Philipp Sonntag

第二次世界大戦後まもなく、ロバート・ユンクはベルリンの広い瓦礫の中に反戦博物館の残骸を探した。その時、彼はベルリン全体が、戦争の結果についての無意識の博物館のように見えたのであ

る。彼は、1925 年にベルリンに設立された小さな反戦博物館で、まさに警告されていたことを目の当たりにした。この博物館は 1925 年にベルリンの平和主義者エルンスト・フリードリヒによって設立されたものである。彼は写真記録「戦争に対する戦争」で第一次世界大戦の惨状を示していた。彼のコレクションは 1933 年にナチスによって破壊された。

現在の博物館

フリードリヒの死から 15 年後の 1982 年、反戦博物館は再びオープンした。2021 年には、フリードリヒの孫であるトミー・シュプリーが館長を務めている。
https://www.anti-kriegs-museum.de/

この博物館では、メダル、戦争を賛美する絵葉書、兵士の日記や手紙、重傷者の写真など、両大戦の写真、文書、物品が展示されている。また、過去何世紀にもわたって使われてきた戦争のおもちゃも見ることができる。大きな世界地図では、現在の問題点を知ることができる。この博物館では、化学兵器や生物兵器などの現代の戦争兵器も扱っている。また、核兵器の影響についても様々な形で紹介されている。これが再び、ベルリン、そして世界的な破壊の到来を予言するようなものにならないことを願うばかりである。

冷戦終結後、西ドイツに配備されていた NATO の核兵器の数が減ったことで、不安はあるものの、少なくとも少しは希望が持てるようになった。それ以前は、ドイツには信じられないほど多くの核兵器が存在していた。NATO の原爆で西ドイツを守ろうとすれば、侵略者が原爆で攻撃するのと同じように、私たちの国は破壊されてしまうだろうとわかっていた。1964 年から 1971 年にかけて、私は VDW（ドイツ科学者協会）の枠組みの中で、戦争の結果と戦争予防に関するドイツの「戦争影響研究」において、このことを詳細に検討した（Carl-Friedrich von Weizsäcker (Hrsg.): "Kriegsfolgen und Kriegsverhütung", Hanser München, 1971）。

エスカレーションの力学

人類はしばしば戦争に巻き込まれてきた。現在のエレクトロニクスはこの問題を悪化させている。現代の軍備開発は、望ましくないエスカレーションのリスクをもたらしている。こうして、戦争は徐々に悪化していくのである。

巨額の資金が「コマンド＆コントロール」に費やされている。複雑さが増すにつれ、制御可能性や妨害も増加していく。（Peter Otto and Philipp Sonntag: Wege in die Informationsellschaft - Steuerungsprobleme in Wirtschaft und Politik. München dtv, 1985）。

サイバー戦争に集中することで、混乱への影響力が非常に大きくなっていく。戦争が始まった後、最大の危険は、戦争中の核兵器の無秩序な使用から生じる。

「ゲッティンゲンの 18 人の原子物理学者」の宣言は、彼らの結論を受けて、事実上の「反戦」となった。「我々は核兵器の製造を拒否する」。そのために役立ったのが、1971 年の「戦争影響調査」という第 2 段階である。私は被害評価のコンピュータープログラムを担当し、被害とエスカレーションのダイナミクスの両方を調査した。当時、私たちが想像力を働かせなければならなかったのは、想定される戦争の戦場であった。今ではよく知られていることである。例えば、アンドレアス・コンラッドは、2021 年 10 月 26 日付のベルリン・ターゲスシュピーゲル紙の 26 ページの「アメリカ人の秘密爆弾計画」で、その例を紹介している。1950 年代のアメリカの戦略空軍司令部（SAC）の観点からは、数ある目標の中でも「価値ある目標」として、ドイツにあるソ連の軍事政権の本部、カールショルスター・ワルドワレーにある建物があった。このような核戦争の計画は、一般的には最高レベルの秘密が守られている。しかし、数年前、1956

年に作成された戦略空軍司令部（SAC）の「1959年の原子兵器要求調査...SM129-56」が機密解除されたため、公開された。SAC の別の研究では、3 発の原子爆弾で消すべき目標として、東ベルリンの「工作機械」「ゴムタイヤ」「鉄道修理会社」、さらには「人口」など 68 点を挙げている。ブランデンブルクにも目標があった。西ベルリンは、放射性降下物のために、ほとんど居住可能な状態ではなかったであろう。

現在新しいことは、政治的に「許容された大逆罪」であり、NATO の高官である元スタッフやその他の人々が「軍事スリラー」を書いていることである。彼らの記述は、「安全保障会議」への科学的投稿よりもはるかに現実的である。武装や暴力を暗示している。それは危険なことであり、エスカレーションをドラマ化しているのである

一例を挙げよう。リチャード・シャーレフ：「ロシアとの戦争-軍の上級司令部からの緊急警告」、『コロナット: Coronat』（2016 年）は、道徳的に提示する小説であり、ベストセラーである。広範囲に機敏なプーチンに、時間内に毅然とした通常兵器で対抗しなければ、すべてが「小説のように」エスカレートしてしまう。

リチャード・シャーレフは、英国の将軍として NATO で高い地位にあった。彼は、ヨーロッパでの紛争が拡大する中で、NATO とロシアの意思決定機関で考えられる議論を、他の誰にもできない方法で真正かつ現実的に描いている。それは、戦争と平和についての決定、すなわち第三次世界大戦が核戦争に発展するための閾値についての直接的な記述である。まるで小説のように、例えば（389 ページ以降）NATO の大規模な攻撃がロシアの司令部を何時間無力化できるかを、以下のように詳細に記述している。ロシアの反撃は、少なくとも暫定的には、「混乱した」ロシアの対ミサイルによって撃ち落とされるのではないか？

武装が増えると、それだけで複雑さが増す。そのため、必然的にエスカレーション回避のコントロールが難しくなるのである。政治的には、「柔軟な対応」を感情的にコントロールすることになるが、それにはどのような規模の戦争であっても、膨大な数の武器と兵力が必要になる。必然的にそのような努力は、戦争への顕著な準備と実践を行うことになる。

小説の中では、ロシアは主権国家として決起し、妥協せずに暴力を行使する準備ができているように見える。NATO とその 28 カ国とは状況が全く異なるのである。例えば、「ロシアの友人」であるハンガリーとギリシャは、EU と NATO の組織に対していつでも拒否権を行使することができ、その結果、少なくとも行動を遅らせることができるだろう。

多くの国の通常兵器がうまく調整されておらず、不必要に高価であることは、何十年も前から公然と議論されてきた。もし欧米が、ロシアのように NATO に経済力を過激に投入し、局所的にエスカレートする準備をしていれば、エスカレーションのどのレベルにおいても欧米の優位性が強くなることは明らかである。

この「小説」で新しいことは、双方に極端な破壊が起こる可能性があるにもかかわらず、戦争への高い準備態勢をとる「論理」が描かれていることである。

反戦のためには反エスカレーションが必要

戦争回避は、破壊を避けるという NATO とロシアの共通の関心事を強調することで成功する。それはまた、国境地帯にある多くの国家の直接的な関心事でもある。冷戦派は、小説の中で「報道」されているように、それを見ている。ロシアによるベルリンとワルシャワへのロケット攻撃が公然と議論されている（385 ページ）。

プーチンを刺激して新たな軍拡競争に巻き込むことは、彼にとっても我々にとっても危険である。武器よりもはるかに効果的なのは、中国が世界的にやろうとしているように、ロシアと我々を経済

的に結びつけることである。ロシアから大量のガスを購入している私たちは、プーチンにとって貴重な顧客であり、彼が私たちを破壊することは割に合わないのである。とはいえ、私たちは国境線を設定するために、ロシアの拡大を阻止しなければならない。その間、私たちは人権侵害に抗議しなければならないが、躊躇するような制裁や「罰」はおそらく効果はないであろう。

戦争の防止は何よりも感情的なものである。若き日のプーチンはライプツィヒに長く滞在していたが、もしライプツィヒに恋人がいたとしたら、軍事的敗北への恐怖よりも、その事実が彼を躊躇させたかもしれない。

エゴン・バールは、VDW での最後の公の場で、現在の大きな脅威として、特に原子爆弾に関連して、サイバー戦争を強調した。VDW の文脈では、特に 1964 年から 1971 年までのエスカレーション・リスクが検証された。エスカレーションには、強力な独自のダイナミズムがある。エスカレーションは、技術的にも、戦略的にも、そして政治的にも、効果的に制限することはできないのである。今日、私たちの唯一の希望は、破壊に対する共通の利益を共通の優先事項としなければならないという、潜在的な敵対者の共通認識である。もし、最初から相手側の経営陣を破壊しようとするようなことがあれば、混乱が生じるであろう。停戦に向けてのデエスカレーションの試みは、ほとんど不可能になるだろう。

核抑止力が通常の戦争を防いできたという議論を、私は 55 年前から聞いてきた。しかし、大国がそれなりに安全だと感じているからこそ、特に多くの「代理戦争」やさまざまなレベルの暴力が発生しており、一方で武器の輸出量は膨大なものになっている。暴力の程度は、メディアを通じて広く知られている。2019 年の暴力的危機は 158 件で、そのうち 27 件が武力紛争や戦争で、ほとんどがアフリカで発生している。理由のひとつは、国連が設立されたとき、加盟国は利害関係を政治的に処理する力を保持していたことである。これにより、戦争犯罪の調査と処罰が組織的に妨げられているのである。

UP - ユナイテッドピープル

世界的に見ても、構造改革の必要性が認識されているのは確かである。しかし、本当の意味で "ユナイテッドピープル：Unite People "となり、"UN "に代わる "UP "という強力な組織を形成するためには、まだまだやるべきことがたくさんあるだろう。前向きな希望の光は、国家元首であっても犯罪者を国際法廷で裁くことが初めて可能になったことである。ハーグ国際司法裁判所の複数年にわたる主任検事が、自らの経験から障害と成功を綴った本がある。

カーラ・デル・ポンテ：「私はヒロインではない -正義のための私の長い闘い」、Westend Verlag、フランクフルト／マイン、2021 年。(Carla Del Ponte: "Ich bin keine Heldin - Mein langer Kampf für Gerechtigkeit", Westend Verlag, Frankfurt/Main, 2021)

彼女は 9/10 ページで、セルビアとルワンダについて書いている。

「スロボダン・ミロシェヴィッチによって、初めて元国家元首が重大な戦争犯罪の裁判を受けなければならなくなりました。ミロシェビッチは、ジェノサイド、人道に対する罪、虐殺、追放の罪で起訴されました。また、ツチ族の残酷な虐殺を行ったルワンダ政府のほぼ全員が裁判にかけられました。1994 年のわずか 100 日間で、多数派のフツ族が少数派のツチ族の約 75%を殺害し、さらに虐殺への参加を拒否した穏健派のフツ族も殺害しました。1998 年、国際法廷で初めてジェノサイドの有罪判決が下されました。画期的な出来事です。ユーゴスラビアの法廷では 90 人、ルワンダの法廷では 62 人の被告人が有罪となりました。」

カーラ・デル・ポンテは、現在の国際刑事法のさらなる発展が未来志向であることを強調しており、

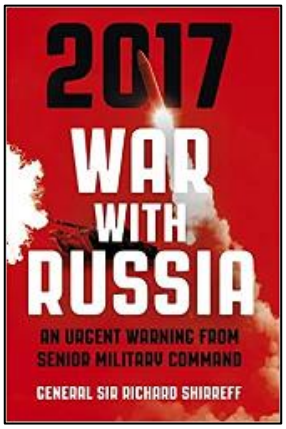
特に 1998 年に成立した「ローマ規程」では、123 カ国が署名・批准している。アメリカは署名したものの、その後批准していなかった。つまり、アメリカ人の戦争犯罪の責任は取り残されているのである。犯罪者である独裁者は、通常、まず自分自身を守ることができる。その後、内部で大きな変化があったり、外部からの強力な介入があったりしないと、被告人の引き渡しは不可能である。また、国連には、すべての国から尊敬される「世界の警察」は存在していない。

私は、戦争準備のための経済的支出は、戦争を回避するための（ほとんどが自発的な）努力にかかる費用の 1000 倍以上であると考えている。肝心なのは、「国際戦争抵抗者協会」（WRI）という団体である。

https://wri-irg.org/en

2021 年 10 月、WRI の 100 周年記念式典が反戦博物館で行われた。政府系の DGAP（ドイツ外交政策協会）の理事であるキャサリン・クリューバー・アシュブルックでさえ、警告している（Berliner Tagesspiegel 2021 年 11 月 2 日、p.7）。「ドイツの安全保障政策にはまだ資金が不足している」と警告し、「外交が適切に機能し、外交政策を改善し、アフガニスタンのような『災難』を避けることも望んでいる」という。

特に、武器の大量輸出を防ぐことが重要だという。結局のところ、ドイツはもはや表立った温厚な国ではなく、外務大臣は世界的な平和の仲介者のような存在になろうとしているのである。



平和のための博物館のネットワーク

しかし、世界的な殺戮を根本的に克服するためには、政府が出資している機関から得られるものよりも、もっと根本的な配慮が必要である。

http://www.ipb.org/members/international-network-of-museums-for-peace/

このような配慮は、平和博物館の世界的なネットワークには不可欠であり、協会の定款の冒頭にはその意図が明確に記されている。

「第 1 条：名称＝このネットワークの名称は、International Network of Museums for Peace（略称：INMP）とする。

第 2 条：目的＝非営利団体である INMP は、平和のために活動する博物館、ギャラリー、図書館の活動を強化し、国際会議を開催し、情報媒体を駆使し、出版物を発行して、平和のために活動する支援博物館、図書館、ギャラリーの協力を促進することで、世界平和に貢献したいと考えている。これらを本規約では総称して「平和のための博物館」と呼ぶ。また、研究、トレーニング、教育プロジェクトも含まれる。」

関連会員であるベルリンの反戦博物館も含まれている。INMP（国際平和ミュージアムネットワーク）は、1992 年にイギリスのブラッドフォード大学で開催された第 1 回国際平和ミュージアム会議がきっかけとなり、設立された。現在、日本国内にも多くの平和博物館が存在している。

すべての貢献が重要である。ローカルな活動の例としては、ベルリンがある。NETZWERK ZUKUNFT（ネットワーク・フューチャー）は、2020 年に 12 のプロジェクトを主催し、さまざまなスポンサーや地元機関から資金提供を受けて、若者の教育に役立てた。ミヒャエル・ゾンマーが率いるプロジェクトは、主に非暴力コミュニケーションの分野における若者のさらなるトレーニングに関するものである。これには、「赤ちゃんを理解する」といった分野から、若い移民の統合、さら

には社会的テーマのコンピューターゲームまで含まれている。

ベルリンにおける私たちの特別な責任は、ベルリンを破壊するために最初の核兵器が開発されたことである。そのため、広島と長崎は、ドイツの降伏から 3 ヵ月後に被害を受けたのだ。これは、ドイツの原子爆弾に対する恐怖から起こったことである。実際には存在しなかったが、戦後「ゲッティンガー18」と呼ばれる原子物理学者やアルバート・シュバイツァーなどの尽力によって阻止されたのである。核兵器を制限し管理するという伝統と困難な課題は、今後も引き継がれなければならない。

韓国政府、陜川に「韓国人原爆被害者追悼施設」の設立を推進…「歴史教育に活用」

ハンギョレ新聞（2021 年 11 月 5 日）

福祉部の韓国人原爆被害者支援委員会で審議登録された原爆被害者 4404 人、生存者 2043 人。

韓国政府は、1945 年に日本の広島と長崎に投下された原爆が原因で命を落とした人々を追悼する施設の建設を、慶尚南道陜川郡（ハプチョングン）で進めることを決めた。

保健福祉部は 4 日午後、ソウル中区（チュング）のソウルシティタワーで韓国人原子爆弾被害者支援委員会（以下「委員会」）を開き、このような内容の追悼施設設立推進計画を審議したと発表した。委員会は原爆被害者（被爆者）の実態調査を行うとともに、支援に必要な内容を審議・議決するため、2017 年に設置された。根拠法は 2016 年に制定された「韓国人原子爆弾被害者支援のための特別法（原爆被害者法）」

原爆被害者法は、原爆投下時に日本の広島、長崎地域にいた人▽原爆投下時から 2 週間以内に爆心地域から 3.5 キロ以内にいた人▽原爆投下時とその後の死体処理および救護に従事するなどの理由で放射能の影響を受けた人▽被害事由に該当する当時は胎児だった人、などを被害者と規定している。現在、大韓赤十字社に登録されている被爆者は 4404 人（今年 6 月 30 日現在）で、うち生存者は 2043 人。　今回の会議で委員会は、原爆被害者の実態分析および保健福祉欲求調査の研究結果を報告した。それによると、原爆被害者は被害から 75 年経った今でも病気などで苦しんでいた。韓国保健社会研究院が健康保険請求資料や国家がん登録資料、死亡登録資料などの公共資料を用いて分析（2019 年 7 月～2020 年 3 月）したところ、原爆被害者だけでなく被害者の子どもでも、放射能被ばくとの関連性が疑われる健康問題がみられた。原爆被害者とその子どもは胃がん、大腸がんなどのがん発生率が一般人口集団に比べて高く、希少難治性疾患、甲状腺疾患、慢性鼻炎、咽頭炎、副鼻腔炎、皮膚疾患、頭痛、気分障害、神経症性またはストレスと関係する身体の障害などの慢性疾患や精神神経系疾患の有病率も高かった。医療の利用と医療費の支出も、原爆被害者の子どもは一般人口集団に比べて多く、特に外来診療の利用率が高かったと委員会は説明した。福祉部は、原爆被害と疾病の因果関係、遺伝的影響を分析するための後続研究を進めている。

委員会は、慶尚南道陜川郡（原爆被害者福祉会館および資料館付近）を追悼施設造成の優先考慮地域として審議した。陜川郡は現在、最も多くの原爆被害者（331 人、生存者の 15%）が暮らしている。クォン・ドクチョル福祉部長官は「痛ましい

歴史の犠牲者たちを胸に刻み、原爆被害の傷と苦しみが少しでも癒されるよう、追悼事業の推進に万全を期す計画だ」とし「原爆被害者追悼施設を通じて正しい歴史認識を確立するとともに、人権および平和のための歴史教育の場として活用されるようにする」と述べた。 イ・ジェホ記者（お問い合わせ japan@hani.co.kr ）
https://news.yahoo.co.jp/articles/d79dc2513035caee68409c7b54f0e74d6fb95cf2

魂に触れる by Pegge Patten

投稿大歓迎
◆字数：500字を目安に
◆願わくは写真を1～2枚
◆期限：随時受け付けます
〈原稿送り先〉
編集委員へ
musejapankyoto@gmail.com

編集後記

今回の「ミューズ」には、海外から投稿されたニュースも紹介しましたので、盛りだくさんとなりました。他の関心のありそうな方と共有して下さいますと幸いです。

「ミューズ」は日英両国後で発行されていますので、翻訳協力者の方々にお世話になっています。（なお翻訳ソフトも使用し、編集しました。）国際的にみると、英語版も出されているメリットとして、海外の平和博物館関係者が「日本の平和博物館事情」を知るうえで、貴重な資料となっています。次号以降も海外からの情報にも門戸を開いておく予定ですので、逆に、日本の平和博物館関係者が「海外の平和博物館事情」を知る上でも参考になるでしょう。

去る 2021 年 11 月 20 日に開かれた市民ネットの総会では、引き続き山根和代が編集担当運営委員を務めることが決められました。安斎は運営委員会幹事を兼ねていますが、「ミューズ」の編集にも協力を続けます。ぜひ、会員の皆様の投稿や企画のアイデアなどをお待ちしています。

現在、「平和のための博物館国際ネットワーク」（INMP）のニューズレターは、新しい編集体制の下で編集方針の見直しと再構築が進行中です。新たな編集方針に基づいて INMP のニューズレターが安定して発行されるようになるまでの間は、とりわけ「ミューズ」が世界の平和博物館情報の媒体として国際的にも重要な意味を担うでしょう。

会員の皆さんの積極的な投稿やご協力を切にお願い致します。